

第4回

沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会

日病薬病院薬学認定薬剤師として単位取得予定

拝啓

春風が心地よいこの頃、先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素より格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、この度、沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会を開催する運びとなりましたのでお伝え致します。県内病院薬剤師のための研究発表の場の提供、他施設の方とのディスカッション、卒後教育がこの研究発表会の趣旨でございます。

薬剤師経験の浅い先生から専門領域の専門認定資格を取得されている先生もこの機会に是非ご参加下さい。

日時 2022年6月4日（土）16:45~17:45

会場 ハイブリッド開催
Web/現地
ホテルロイヤルオリオン 2F 旭の間
〒902-0067 沖縄県那覇市安里1-2-21
Tel: 098-866-5533

PROGRAM

■ 座長

中部協同病院薬局長 入月 健先生

口演発表時間：7分、質疑応答：5分

① 16:45~16:57

『骨粗鬆症治療薬に関する診療フローの実践』

演者：浦添総合病院薬剤部 親富祖 翔太郎先生

② 16:57~17:09

『保険薬局薬剤師に対して開催したオピオイド勉強会の評価』

演者：中頭病院薬剤部 仲本 倫子先生

③ 17:09~17:21

『沖縄県3病院合同フォーミュラリー～地域フォーミュラリー推進に向けて

(第1報：策定・導入まで)』

演者：友愛医療センター薬剤科 安丸 史織先生

④ 17:21~17:33

『当院の「妊婦/授乳とくすり外来」における現状調査と今後の展望に向けて』

演者：沖縄県立中部病院薬局 比嘉 綾子先生

⑤ 17:33~17:45

『リファンピシンによる相互作用が引き起こした顕著なシクロスポリン濃度低下の一症例』

演者：琉球大学病院薬剤部 有本 諭司先生

※本研究発表会は沖縄県病院薬剤師会第51回通常総会開催後に同会場にて開催予定です。

主催 沖縄県病院薬剤師会

第4回

沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会

会期:令和4年6月4日(土)16:45~17:45

会場:ホテルロイヤルオリオン 2F 旭の間

Web 開催

主催:沖縄県病院薬剤師会

目次

16:40～16:45

開会の辞

琉球大学病院

中村 克徳

『研究発表』

口演発表時間:7分、質疑応答:5分

16:45～17:45

■座長

中部協同病院

入月 健

①16:45～16:57

『骨粗鬆症治療薬に関する診療フローの実践』

浦添総合病院薬剤部 親富祖 翔太郎

②16:57～17:09

『保険薬局薬剤師に対して開催したオピオイド勉強会の評価』

中頭病院薬剤部 仲本 倫子

③17:09～17:21

『沖縄県3病院合同フォーミュラリー～地域フォーミュラリー推進に向けて(第1報:策定・導入まで)』

友愛医療センター薬剤科 安丸 史織

④17:21～17:33

『当院の「妊婦/授乳とくすり外来」における現状調査と今後の展望に向けて』

沖縄県立中部病院薬局 比嘉 綾子

⑤17:33～17:45

『リファンピシンによる相互作用が引き起こした顕著なシクロスポリン濃度低下の一症例』

琉球大学病院薬剤部 有本 諭司

17:45～17:50

閉会の辞

大浜第二病院

姫野 さやか

第4回沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会開催にあたり

沖縄県病院薬剤師会会員の皆様、平素より病院薬剤師会の活動にご理解とご協力賜り誠にありがとうございます。

さて、沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会の開催はCOVID-19の影響を受け2年間のインターバルをはさみ今回が第4回目の開催の運びとなりました。

沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会は「病院・診療所薬剤師の学術技能向上」および「学会、講習会、研修会の開催」、さらに「研究発表の場の提供」や「他施設薬剤師とのディスカッション」等を目的としております。

今後ますます、この会を発展させ継続開催していければと考えております。今後とも皆様のご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

運営委員	琉球大学病院	潮平英郎
	琉球大学病院	有本諭司
	沖縄県立北部病院	勝連真人
	沖縄県立中部病院	上原淳奈
	那覇市立病院	永井賢作
	浦添総合病院	浜元善仁
	中頭病院	島袋朝太郎
	友愛医療センター	小杉卓大

ご案内

1) 今回の研究発表会の口演時間は下記の通りとなります。

発表:7分、質疑:5分、計12分

Memo

骨粗鬆症治療薬に関する診療フローの実践

親富祖翔太郎、東千夏、川上博瀬、宮里弥篤、平田やよい、村田利恵子、浜元善仁
翁長真一郎
浦添総合病院 薬剤部

【目的】

大腿骨近位部骨折および椎体骨折は、高齢者に多い疾患であり、また既存脆弱性骨折を有する症例では、二次骨折を予防する必要性が報告されている。そのような背景から、大腿骨近位部骨折や椎体骨折の再発予防を目的に、当院入院患者の骨粗鬆症治療薬に関する診療フローを作成した。薬剤師がスクリーニング実施や、ビスホスホネート薬剤(以下、BP)や活性型ビタミンD製剤(以下、VD)の薬剤選定を担った結果を報告する。

【方法】

2020年9月から2021年3月までに入院した大腿骨近位部骨折および椎体骨折で診療パス適応となった108例を対象とした。調査項目は、①入院前の内服の有無②スクリーニング件数③スクリーニング後に、BP・VD服用を継続もしくは新規開始が必要と判断した症例数(以下、内服必要数)④スクリーニング後の新規内服開始件数(以下、新規件数)を後方視的に調査した。

【結果】

①入院前の内服有りは33症例(BP7件、VD19件、両剤7件)、内服無しは75症例であった。②スクリーニング件数は87症例であり、パス適応の80%であった。③内服必要数は84症例とスクリーニング件数の96%を占めている。④新規件数は、BP44件、VD57件であった。

【考察】

スクリーニング後のほぼすべての症例で、骨粗鬆症治療薬の必要性が把握できた。薬剤師が診療フローに参加することで、投与経路・用法の選択、副作用モニタリングを行う事により薬剤の適正使用が推進され、アドヒアランスの向上、副作用リスクの低減に繋がると考えられる。スクリーニング率を向上させるための更なるシステム構築、また退院までの継続した患者サポートが課題として挙げられる。今後は退院後の薬剤継続率および再入院率を把握しながら医療の質に貢献していきたい。

保険薬局薬剤師に対して開催したオピオイド勉強会の評価

○仲本倫子、渡慶次憲彦、島袋朝太郎
中頭病院 薬剤部

【目的】

当院は、2018年に近隣保険薬局薬剤師(以下保険薬局)に対してオピオイドの知識や服薬指導に関するアンケート調査を行った結果、オピオイドの特徴や使い方などの理解度が低く、服薬指導に影響を及ぼしている可能性が示唆された。実際、保険薬局でオピオイドの服薬指導を受けた患者が入院した際、レスキュー薬の使い方について服薬指導が正確に行えていなかった事例が発生した。そこで、オピオイド教育を目的に保険薬局に対して勉強会を開催し、その効果を評価したので報告する。

【方法】

保険薬局に対してオピオイドの基礎的な知識や特長、使い方、副作用対策を3回に分けて開催。勉強会終了後に、勉強会内容の満足度についてアンケート調査を実施した。また、第1回勉強会の開催前と第3回勉強会終了後に同様の確認テストを行い、その前後で正解率を比較した。

【結果】

勉強会参加は6施設、平均参加者26人、薬剤師歴は1～3年目60%、4～6年目30%、10年目以上10%であった。全勉強会の平均したアンケート調査結果について満足度は、非常に良い80%、良い20%、普通、分かりづらい0%。難易度は、難しい14%、やや難しい48%、普通38%、易しい0%。理解度は理解できた46%、やや理解できた50%、どちらともいえない4%、理解できない0%であった。総合評価について、勉強会に参加して非常に良かった83%、良かった17%であった。また、確認テストの正解率は、勉強会の前後で22%から86%と上昇した。

【考察】

保険薬局に対するオピオイド勉強会は、理解度、総合評価ともに高く開催意義が認められた。また、確認テストの正解率上昇は、オピオイドの知識向上に繋がり、服薬指導に活かされると推測される。専門的な知識をもって患者にアプローチすることは必要不可欠であり、病院薬剤師として、保険薬局の連携を密にし、今後は、症例を通じたグループワークなどを開催し、緩和ケアに関する服薬指導のスキルアップを図りたい。

沖縄3病院合同フォーミュラリ～地域フォーミュラリ推進に向けて～ (第1報:策定・導入まで)

○安丸史織¹⁾、平識善彦¹⁾、宮里弥篤²⁾、益田菜月²⁾、渡慶次憲彦³⁾、島袋朝太郎³⁾
國分千代¹⁾、翁長真一郎²⁾、安座間 照子³⁾

1)友愛医療センター薬剤科 2)浦添総合病院 薬剤部 3)中頭病院 薬剤部

【目的】

近年、医療機関において、患者に対して最も有効で経済的な医薬品の使用指針であるフォーミュラリの取り組みが始まっている。今回、友愛医療センター、浦添総合病院、中頭病院の3病院で連携しフォーミュラリを策定・導入したので報告する。

【方法】

友愛医療センター、浦添総合病院、中頭病院の3病院合同で、各病院の薬剤部(科)の長、DI担当にて月1回フォーミュラリ準備会議を行った。策定までの手順として①検討薬効群の選定、②採用薬や使用実績の確認、③各病院で有効性・安全性・経済性・合理性を評価しフォーミュラリ案を作成、④各病院案を元に合同推奨薬を決定とした。導入にあたり薬事審議委員会等での承認を得て、医師等へフォーミュラリの周知を行い開始とした。

【結果】

最初の検討薬効群は睡眠薬(短時間型)とした。転倒リスクが比較的低い事、使用状況や代替性等からゾルピデム・エスゾピクロンを合同推奨薬に決定し、2020年7月に睡眠薬フォーミュラリを開始した。推奨薬の表示方法、非推奨薬の取り扱い、導入後の評価項目も決定した。

【考察】

3病院合同フォーミュラリでは、3病院で多角的な視点での評価、導入に向けた問題点の相談・検討ができ、同時に開始することができた。経営母体が異なる病院が連携してフォーミュラリを策定する事は、地域フォーミュラリへの足掛かりとなり地域医療の連携に繋がると思われる。

当院の「妊娠/授乳とくすり外来」における現状調査と今後の展望に向けて

○比嘉 綾子¹⁾、具志頭 聡子²⁾、津波 美奈子²⁾、南保 千尋³⁾、野波 陽子¹⁾、
徳嶺 恵子¹⁾、大橋 容子⁴⁾、大畑 尚子⁴⁾

1)沖縄県立中部病院 薬局 2)沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 薬局

3)沖縄県立北部病院 薬局 4)沖縄県立中部病院 総合周産期母子医療センター

【目的】

2005 年厚生労働省の事業として国立成育医療研究センターに「妊娠と薬情報センター」が設立され、地域差なく質の高い相談業務を行うために全国 47 都道府県に拠点病院が設置されている。2013 年 5 月より沖縄県の拠点病院として当院に「妊娠/授乳とくすり外来」が開設された。外来開設 8 年にあたり当院の現状調査を行い相談の意図や内容を把握する。

【方法】

2013 年 5 月～2021 年 3 月までの 8 年間で「妊娠/授乳とくすり外来」に相談依頼のあった 83 人を対象に、相談のきっかけ、相談依頼時の妊娠週数、相談内容、相談薬剤、疾患等について相談依頼時に依頼者が記入する「妊娠と薬情報センター問診票」から後方視的に調査した。

【結果】

相談依頼のあった 83 人のうち面談キャンセルは 12 人であった。キャンセル内訳は当日未来院、流産や中絶のため面談不要、面談前に出産、経済的理由であった。相談のきっかけ:医師からのすすめ 49 人(59%)、自ら希望 34 人(41%)。相談依頼時の妊娠週数:8 週未満 14 人(16.9%)、8 週～16 週未満 21 人(25.3%)、16 週～22 週未満 11 人(13.2%)、22 週～28 週未満 7 人(8.4%)、28 週～40 週 12 人(14.5%)、産後 1 人(1.2%)、非妊娠 17 人(20.5%)。相談内容件数(複数回答):「今から服用する可能性のある薬」16 件(12%)、「持病で服用している薬の妊娠に対する影響」60 件(48%)、「持病で服用している薬の授乳に対する影響」26 件(20%)、「妊娠中に服用してしまった薬が心配」22 件(17%)、「パートナーが服用している薬」4 件(3%)。疾患の内訳(複数回答):てんかん 11 人、精神疾患 48 人、高血圧 2 人、糖尿病 5 人、他 46 人。相談薬剤件数(複数回答):抗てんかん薬 50 件、精神疾患治療薬 84 件、睡眠薬 31 件、漢方薬 23 件、他 260 件。

【結論】

今回の現状調査から、てんかんや精神疾患の治療薬を服用している女性の多くが薬の妊娠への影響に不安を持っていることがわかった。「妊娠/授乳とくすり外来」では根拠に基づいた薬の情報提供を行い、持病や薬の影響を過剰に心配しないように正しい知識を依頼者に得てもらうことが大切であり、伝える薬剤師も薬の知識だけでなくカウンセリングスキルが必要である。しかしどのような疾患でどの薬を服用している女性が妊娠への影響について不安に感じているかという現状を知る薬剤師は少なく、今回の現状調査の結果を共有することで地域の薬剤師の関心を高め、妊娠中や妊娠を希望する女性を支援する機会を拡げていきたいと考える。

リファンピシンによる相互作用が引き起こした顕著なシクロスポリン濃度低下の一症例

○有本 諭司、国場 訓、石井 岳夫、潮平 英郎、諸見 牧子、与那覇 房子、中村 克徳
琉球大学病院 薬剤部

【背景・目的】

リファンピシン(RFP)はCYP3A4誘導作用を有しており、CYP3A4基質併用時にはその薬剤の血中濃度低下を引き起こすことが知られる。しかしながら、血中濃度低下の時期や程度は十分に明らかではない。当院でのRFPとシクロスポリン(CyA)併用例で、薬剤師の介入によりCyA治療薬物モニタリング(以降TDM)を実施し濃度推移を確認することができた症例を経験したので報告する。

【症例】

60代女性、ネフローゼ症候群に対する免疫療法としてプレドニゾロン30mg、CyA75mgを服用していた。潜在性肺結核感染症に対しイソニアジド(INH)200mgが追加されたが、INH服用後の末梢神経障害を認めたため、代替薬としてRFP450mgが選択された。RFPによる相互作用を懸念されたため、薬剤師よりTDMの実施を依頼。併用前のCyA服用2時間後血中濃度は939ng/ml、856ng/mlであったが、併用5日後には177ng/mlにまで低下した。その後、RFPは中止、ピリドキサル増量のもとINHが再開された。

【考察】

RFPによる代謝誘導は数日～数週間を要する場合がありますとされ、併用薬によっては頻回なTDMを要する可能性がある。今回の症例では併用開始5日後に約20%にまで濃度低下を認めたため、TDMによる血中濃度評価は病勢コントロールに必須であったと考えられる。両剤を併用する場合はCyAの血中濃度低下を念頭において早期にTDM依頼を行うことは重要であると考えられる。